

秋山木土の修業生活を知らず、私にはとて
も耐えられないと思つた。しかし、厳しい修
業で丁稚たろか成長していく姿から本気度が
伝わつたし、心を打たれた。また、自分と重
なる部分もある。た。厳しくされたのはありか
た。いことでは、
入つた。か、
る余裕はないかもしない。し、御く
ちには、社長や先輩たち、自分の周りのま
の人への感謝や、あやがたが必がかる。
それと、このくらい厳しくなれば、一流の
出来た職人にならなければいけません。た。た
の職人になるか、出来た職人になるかは、目
の前にある仕事や起こる課題に打ち、どれた
けむたむきに挑戦し、努力するかにか、
いる。この丁稚生活は、一見するととても厳
しいが、愛がたくさん話ま、
らり愛、先輩からの愛、親や先生からの愛、
道具への愛。様々な愛によつて成長できる、
幸せな生活だと思つた。

現代は誘惑がとて多い。生半可な気持ち
では、丁稚生活を全うすることはいかに
丁稚たちの職人への思い、意志の力には感銘
を受けた。一番仰ぐ時期に辞めさせること
には、社長の職人を数多く育てたいといふ
強い思い、自分中心にはなく、弟子のことを
第一に考えているところなど、尊敬する部分
は数多かつた。そんな社長の元で働いている
こともまた、丁稚たちにと、幸せなのだ。こ
うと思ふ。背中を見つけた丁稚たちは、必ず

真の出来た職人になると思ふに。
私は正直、丁稚たちのような覚悟を持って
入社してはいない。だから、自分を追い込んだ
り、自分に目を向けることがいかにできな
か、たと思ふし、皆の愛に気付くのも遅か
た。自分が変わるの時間もいかにか、こしま
た。しかし、少しづつではあるが、確実に変
わ、ていく。だが、課題で多くのことを学ん
でいくもりの、まだ自分の身にはな、ておら
ず、志れてしま、ていくことのあ、多い。自

分の中に落とし込み、無意識にも出てくるようにしなければならぬ。それが今後の課題だ。

本書に「親のこと喜ばせられたい、他人を喜ばせることはできない」と書かれていたが、その通りだと思ふ。母は、私が生きていくだけで幸せで、親孝行なのだと「言」てくれる。そんなことが言える母の子に生まれる。本当に良かった。だが、これからは私の行動によつて親孝行し、両親に喜んでほしい。

年齢を重ねることによりその思いは強くなる。課題を通い、より一層その思いが強くなる。いつか今の仕事が自分の天職と言えよう。今は目の前に起こることに一生懸命取り組む、成長し、世の中に思返しができる人間になれよう。努めていく。そして自分を磨き、自分を愛し、愛を与えられる人間になれよう。月々生きていく。